International Cooperation Center for
Agricultural Education, Nagoya University

ICCAE news

No.10 2005.1.31

名古屋大学 農学国際教育協力研究センター ニュース

平成17年1月31日発行 第6巻 第2号（年2回発行;通巻10号）

発 行／名古屋大学 農学国際教育協力研究センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
TEL 052-789-4225（受付） FAX 052-789-4222
http://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~iccae/index.html
e-mail:iccae@agr.nagoya-u.ac.jp

オンライン教育のための カリキュラム開発

農学国際教育協力研究センター 第６回オープンフォーラムを開催

（2004年10月1日）

プロジェクト開発研究領域 松 本 哲 男

農学国際教育協力研究センター（ICCAE）は、10月1日（金）「オンライン教育のためのカリキュラム開発」をテーマに第6回オープンフォーラムを豊田講堂第1会議室で開催しました。

今回のフォーラムでは、9月27日から30日まで開催された第15回アジア農科系大学連合（AAACU）隔年会議を目指して、生命農学研究科とICCAEが共同で研究・開発してきた「AAACU加盟校間の遠隔教育のためのeラーニング・システム」を実際に運営していく上で問題になる点に焦点を合わせて、討議が行なわれました。フォーラムにはAAACU事務局長アルセニオ・バリサカン博士、AAACU副委員長シーファ・チェング国立中興大学農業資源学部長、イェヌ・ワン国立中興大学教授をはじめ、この一年間、ICCAE客員教授・研究員としてカリキュラム開発の研究に携わってこられたリタ・ラウデ フィリピン大学教授、エディス・セディコールSEARCA部長、ツィリン・チェン国立中興大学助手の皆さんと、生命農学研究科の関係者が出席しました。討議は、eラーニング教育に加えるべきコースの選定・カリキュラム開発、単位認定制度、受講生登録制度、授業料、講義方法と著作権、コース内容の評価方法、の項目ごとに行なわれました。当面は相手大学の担当教員との間の個人的な対応で運営するが、2 年以内に組織的対応が出来るよう、項目ごとにガイドラインを明確にすることが確認されました。

オープンフォーラムの討論風景

オープンフォーラム参加者

農学系遠隔教育のための eラーニング・システムの開発

第15回AAACU隔年会議を開く

（2004年9月27日～30日 於名古屋大学）

ICCAE客員研究員 陳 姿 伶
（台湾・国立中興大学）

ICCAEは、第15回アジア農科系大学連合（AAACU）隔年会議を9月27日から30日まで、生命農学研究科、生物機能開発利用研究センター、AC21と共同で開催しました。「アジアにおける農業・生物産業向け遠隔教育のためのeラーニング・システムの開発」をテーマに掲げ、野依記念学術交流館で開かれた今回の会議には、アジア14ヵ国からの44名を含めて200名を超す参加者があり、盛会でした。

会議では、国際的交流と協力、草本生物科学、高等

（2ページ目上段に続く）

（1ページ右上段より続く）
農業教育と地域開発、遠隔教育、農学カリキュラムと人材の開発、eラーニング、ICT準拠の教育について発表された他、台湾、ネパール、フィリピンからの参加者による国別報告セッションが持たれました。

会議を通じて、eラーニングは高等教育と関連させて様々な利点をもつことが確認されましたが、AAACU内で学生交流プログラムを強化するための戦略としてeラーニングをうまく活用するうえでは、さらに検討すべきいくつかの課題が残されていることも、明らかになりました。この結果を踏まえて、加盟大学は、最新のeラーニング・プロジェクトを走らせてみて出てきた問題点を分析し解決するために、隔年会議後１ヶ月以内に対策委員会を設けることに同意しました。隔年会議の最後に声明が出されましたが、これは次のウェッブサイトで参照できます。
http://www.nagoya-u.ac.jp/aaacu/aaacu-e.html

第15回AAACU隔年会議　参加者

AAACU加盟大学よりカウンターパートを招きWeb CT Vista講習会を開催

（2004年6月13日～19日）

プロジェクト開発研究領域　佐々木太郎

ICCAEは、6月13日から19日までの1週間、生命農学研究科と共同で、本学教員とAAACU加盟大学のカウンターパート（C/P）教員を対象とする、eラーニング・コースモジュール開発のためのWebCT講習会を開催した。今回の講習会の特徴は、①WebCT Vistaという最新バージョンのソフトウェアを教材に採用したこと、②AAACU加盟大学からC/Pを招いたこと、③WebCT講習会の開催とC/P間でのコースモジュール開発を同時期に行い、短期間に集中的、効率的にeラーニング・コンテンツ作りを行えるようにしたことである。

講習会では、最も基礎的なWebCT Vistaに特有な画面名称を覚え、学生としてWebCTを体験することから始まり、デザインの基礎、セクションの構築方法、ツールの追加、コンテンツ・モジュールの作成、テスト・課題の作成という応用的部分まで、WebCT Vistaの実践的な運用技術を効率的に学習した。

本センターの2000年度客員教授だったセディコール先生（SEAMEO SEARCA；東南アジア文部大臣機構高等教育研究地域センター）のご尽力で、本学のeラーニング・コースモジュール開発担当教員のC/Pの人選がAAACU加盟大学各校で進められた。その結果、ムハマド・ナイム（ガジャマダ大学、インドネシア）、ボスタン・ラジャググ（同）、ピンチー・タン（中興大学、台湾）、ロドリゴ・セビドス（レイテ州立大学、フィリピン）、スダワン・チャイソムシー（カセサート大学、タイ）の５教員を講習会に招くことができた（インドネシア・ガジャマダ大学のC/P教員２名の滞在費はICCAEが負担）。なお、ICCAEではこれまでに、チェンマイ大学（タイ）のヌッタ・クアンプラサート、マレイシア農業大学のノリハン・サラの両先生を招聘し、生命農学研究科のC/P教官と共同でeラーニング・コースモジュールの作成を行っている。今回の講習会を通じて教員間のコミュニケーションが積み重ねられたことから、AAACU大会に向けてeラーニング・プロジェクトの取り組み気運が高まったものと思われる。

今回の講習会の一部として、情報連携基盤センターの梶田将司助教授の科学研究費による2日間のWebCT Vista講習会を組み込ませていただいた。梶田先生のご好意に深く感謝申しあげたい。

アフリカでの統合型海外学術研究

プロジェクト開発研究領域　門平睦代

私は、2003年度から継続して、アフリカ4ヶ国（ザンビア、タンザニア、マラウイ、ケニア）を対象とする2つの海外学術研究に関わっている。

ひとつは「南部アフリカ3ヶ国における小規模農家レベルでの畜産振興を妨げる要因の研究」（代表者：門平）で、研究目的は、ザンビア、タンザニア、マラウィの3ヶ国の小規模農家を対象として、畜産振興を妨げている要因を、農民・NGO・政府・研究者などの視点から総合的に把握・分析し、実現可能な対策を提示することである。名大からは複数分野（獣医畜産学・文化人類学・開発学）の専門家が、また、海外の協力研究者として、ザンビア大学獣医学部・農学部、ソコイネ農業大学獣医学部・農学部（タンザニア）、マラウイ大学農学部の教員が参加している。今年度の調査は、7月31日～8月23日に実施された。この研究を通じて、アフリカの大学教員が現場のニーズをよく理解し、教育内容の改善に務め、適切な（専門）情報を政府関係者や学生に伝えられるようになれば、自助努力による貧困緩和対策の実践につながるものと、期待している。

もうひとつの研究は、「ケニアにおける土壌浸食の実態解明とその防止策」（代表者：名大大学院環境学研究科・星野教授）である。ケニア国内のビクトリア湖周辺で発生している大規模なガリー侵食地・キスム地域を対象として、地質学・地理学・生態学・農学の各専門分野から侵食の実態を解明し、総合的な見地に立つ実効的な防止策の提言が目的である。私は、農学班として、今年8月23日～9月10日の期間、ナイロビ大学の教員たちと協力しあいながら調査に参加し、ガリー形成に土地利用と農業活動がどのように影響するかを調べた。

住居近くまで迫るガリー

ナイジェリア大使がセンター来訪

去る9月15日、アリュ・ナイジェリア大使（写真右から3人目）とエヒオブチェ公使（左から2人目）が農国センターを訪問されました。効果的な植林方法を導入して砂漠化の進展を抑制し、高収量品種の穀物を導入するなどして農業生産性を高める課題など、同国が抱えている様々な農業問題を、日本の大学等の研究機関や研究者と共同して取り組んでいける可能性等につき、センタースタッフと1時間半にわたり意見交換しました。

JICA-GIS（地理情報システム）研修コース最終回（5年度目）が終了

（2004年8月16日～9月23日）

協力ネットワーク開発研究領域　北川勝弘

JICA-GIS研修コースの最終回（5年度目）が、去る9月下旬に終了しました。インターネットを通じて無料でダウンロードできるフリーGISソフトウェア「GRASS」を対象ソフトとして取り上げ、研修員が帰国後すぐに、自国でGIS技術普及の先頭に立ってもらえるように配慮されたこの研修コースは、JICAが開催している全国の数多くの研修コース中でも海外からの人気が高く、JICA 内で“コスト・パフォーマンスの点で極めて優れている”研修コースのひとつとして評価されている、と言われます。

今回の研修員は、アルゼンチン、マケドニア、ミャンマー、パプア・ニューギニア、パラグアイ、ウルグアイの6ヵ国から6名が参加。技術研修期間の4週間は、1週ごとにGISの基礎知識と各種コマンド操作方法、リモートセンシング、GPS（地球測位システム）などの室内実習が行われ、また毎週末にはGISを活用している機関へ出かけて現地見学・実習が行われました。今年度の技術研修講師として、名古屋大学、熊本大学、鳥取大学から4名を招いた他、現地見学会が、GIS会館（名古屋市）、岐阜県立森林文化アカデミー、兵庫県立人と自然の博物館、京都府立大学で行われました。

GIS研修風景

客員教授紹介

円借款業務と大学の戦略的連携

国際協力銀行（JBIC） 松澤猛男
客員教授第Ⅰ種（任期：2004年4月6日～2005年3月31日）

円借款における農業分野の支援は貧困削減や住民参加といった幅広いものに変わっており、厳しい財政事情も踏まえ、戦略性を高めています。開発途上国は、農学研究の素材提供の宝庫であるとともに、これまで築いてきた人材ネットワーク等、日本の農学分野が比較優位を有していると認識しています。今回の研究では大学と円借款を担当する国際協力銀行の戦略的連携スキーム構築のための制約や課題を明確にし、具体的なスキームを提案することを目指しています。

略歴 1956年生まれ。1979年東京大学経済学部卒業。同年、海外経済協力基金（現国際協力銀行）入社。以降、タイ、バングラデシュ駐在の他、円借款および民間開発投資事業を担当。2004年より国際協力銀行 開発セクター部次長。

AAACUネットワークにおける遠隔教育のための農学カリキュラムとeラーニング・システムの開発

エディサ C. セディコール（SEAMEO SEARCA）
客員教授第Ⅲ種（任期：2004年4月1日～6月30日）

私は名古屋大学に2度目の客員教授／客員研究員として滞在中、AAACUと共同して名古屋大学が進めている、カリキュラム開発とeラーニング・プロジェクトの第2段階の仕事に取り組みました。

（内容：AAACU加盟校の農学カリキュラム中から効果的なプログラムの吟味と特長づけ、コースと学部のカタログ素案原稿の作成など）。

また、名古屋大学のeラーニング・トレーニング組織委員会の支援と、2004年9月に開催される第15回AAACU隔年会議の準備のため名大チームの一員として活動しました。

今回、名古屋大学へ招聘頂いたことにつき、ICCAEと生命農学研究科に深く感謝いたします。私のささやかな寄与がAAACUネットワークにとって有益なものであることを、願っています。

略歴 1956年フィリピン生まれ。1976年サン・ジョセ・レコルトス大学卒業。セントロ・エスコラー大学（フィリピン）より修士学位（1989年）および博士学位（1996年）を取得（公共管理）。サン・ジョセ・レコルトス大学教員として勤務後、1977年～1979年ヴィサヤス州立農業大学勤務。1993年ブリティッシュ・コロンビア大学（カナダ）海外交流教員。2000年11月～2001年1月ICCAE客員研究員。1988年～今日まで：SEAMEO SEARCA（東南アジア文部大臣機構高等教育研究地域センター）社会人教育部職員（現在部長）。

AAACUの遠隔教育用eラーニング・システムの開発

陳　姿伶（台湾・国立中興大学）
客員研究員（任期：2004年7月16日～10月15日）

私は、ICCAEの客員研究員として、AAACU−名古屋大学間のeラーニング・プロジェクトの共同研究に携わりました。今回の滞在期間中、私はeラーニング・システムの試行に向けて、9つのコースにつき、学習者を支援するソフト環境整備のための開発を行いました。具体的には、コース受講案内、コース登録ガイドライン、WebCT vista TM学生用ユーザーガイド、プロジェクトWeb頁の作成です。

私が本センターで過ごした3ヶ月間は、いろいろな意味でとても素晴らしいもので、ICCAEの教職員や生命農学研究科の教員の皆さんは、様々な面で一貫して私の仕事を支えてくれました。

また、日常生活面では、ここでの生活は面白くて大変楽しいものでした。そうした忘れがたい、実り豊かなご協力をいただいたことに、心からお礼を申しあげます。

略歴 1972年台湾生まれ。1994年国立台湾大学卒業。ペンシルバニア州立大学（米国）で修士学位（1997年）および博士学位（1999年）を取得（成人教育）。2000年国立中興大学助手に採用（農業普及教育研究所）。

2004年度農学国際センターオープンセミナー開催記録（9月まで）

回数	日　時	テーマ	講　師	所　属	参加者数	備　考
第1回	5月18日	開発プロジェクト実施で見落とされがちなポイント—応用されない理論—	野田直人氏	JICA長期専門家；チーフ・アドバイザー・セネガル総合村落林業開発計画	23名	
第2回	6月17日	地球温暖化対策への提案—熱帯での植林と炭化利用—	沖森泰行氏	㈱KANSO 生物環境研究所主任研究員	20名	
第3回	7月13日	マラウイの畜産振興を妨げる問題点と改善のための展望	Prof. M. W. Mfitilodze	マラウイ大学農学部助教授	19名	
第4回	8月23日	アフリカ南部のナミビア半乾燥地帯における稲作の可能性	Dr. Luke Kanyomeka	ナミビア大学農学部講師・作物学科長	18名	
第5回	9月16日 17日	遺伝子組み換え作物の社会的受容—インドにおけるBtワタに関する論争—	山口富子氏	ミシガン州立大学社会学部	75名	つくば市及び東京都；(独)農業生物資源研究所等と共催